

第16回 土佐の皿鉢ゼミ開催

教職実践高度化専攻（教職大学院）の院生による実践研究発表「第16回土佐の皿鉢ゼミ」が、2026年2月11日（水）に開催されました。今回も対面および Web 会議システム Zoom による同期型オンラインのハイブリッド方式で行われ、92名の方が参加してくださいました。

開会行事の中野俊幸 専攻長の挨拶では、佐伯胖（ゆたか）氏が教育研究における基本姿勢として示した「タテ糸」「ヨコ糸」、そして研究をより面白いものにするための「ナナメ糸」について紹介がありました。「タテ糸」によって自分の研究を歴史や理論の流れの中に位置づけ、「ヨコ糸」によって他分野の理論やモデルを取り入れ、さらに「ナナメ糸」として何に対抗し、何を批判するのかという問題意識を明確にすることで、研究を単なる経験談の整理に終わらせず、有効でおもしろいものにしていく必要があることが述べられました。最後に、参会された方々の多様な見識にもとづき、今後、厳しい評価や省察がなされることを期待している旨が伝えられました。

閉会式の講評では、閉会式の講評では、香長中学校の杉本瞳 教諭から「学びを般化する方法について考えられればと思っ

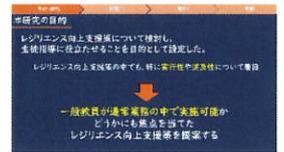
ている」との抱負が述べられました。続いて、日高特別支援学校しんほんまち分校の平地正幸 教頭からは、「それぞれの先生方が組織として共通認識を持って取り組むということを意識・工夫している」との理解が示されました。さらに、芸西中学校の竹本佳奈 教頭からは、「現場に帰って実践をしていかなければならないと改めて感じた」との感想が述べられました。最後に学校教育研究センター 藤中雄輔 センター長から多様な視点への開かれた姿勢と、理論と実践を往還する学びを通じて専門性を高め、「教職大学院の修了と存在意義を常に意識しながら、高知県の子どもたちの今と未来を支えることのできる学校現場や教員を支援していく」という、決意を含めた挨拶をいただきました。

本紙では、開会行事後、各会場で発表した院生のそれぞれの研究における成果や課題、各コースのテーマ別協議での活発な議論についてご紹介いたします。

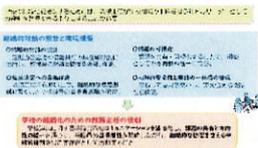
【学校マネジメントコース】

M2 秋澤和希さん 学校教育における生徒指導上の諸課題への教師の手立て-レジリエンス向上に焦点を当て-

生徒指導上の諸課題の多くに共通すると想定されるレジリエンスに焦点を当て、レジリエンス向上支援策を検討し、生徒指導に役立たせることを目的として研究しています。小学校高学年および中学年を対象に実践した支援の効果検証結果を報告し、発達段階による支援効果の違いについて明らかにしています。



M2 上田稚子さん 教務主任の学校組織への効果的な関わり方について



教務主任のリーダーシップの下、学年主任会の運営やプロジェクトチームの取組の推進を通じて、情報共有の可視化、業務の効率化、方向性の統一、協働の促進を図りました。こうした取組が、教職員の主体性や当事者意識を高め、学校の心理的安全性と一体感の醸成に寄与したことが示唆されました。

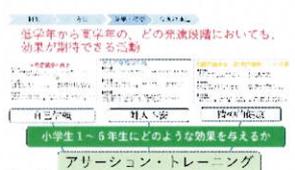
M2 氏原千恵さん 業務の効率化・削減により教育の質を高める学校経営 -実習校の実情に即した業務の効率化・削減の手法を探る-

本年度、実習校の学校経営方針に盛り込まれている教育活動のデジタル化に関する2つの取組に介入し、組織的に業務の効率化・削減をするために業務DX化の方策を試行した結果、教職員及び生徒の双方が、それぞれの活動を自分事と捉え、学校内における教育活動の円滑な推進に寄与することができました。



項目	4月	5月	7月	10月	11月
業務
教育
その他

M2 岡野秀哉さん 不登校未然防止のための良好な人間関係の構築の取組



小学校の全学年を対象に実施したアサーション・トレーニングの結果、発達段階に関わらず高い有用性が認められました。自己信頼感や主観的健康感の向上、対人不安の低減が示唆され、不登校の要因とされる無気力・不安、さらには学校での人間関係への改善効果も十分に期待できることが明らかになりました。

M2 田村佐緒里さん 中山間地域における小規模校の学力定着に向かう組織の在り方 -研究推進委員会の役割を中心に-

1教科1人しか配属されない小規模校において、授業づくりを改善するため、基準となる「授業チェックシート」を考案し、それを見える化させることによって共通のツールとし、研究推進委員会を校内の核とした、個人依存ではなく組織的に授業改善に向かうシステムを構築することができました。






M1 石原萌さん 学校業務改善による教育の質の向上へのアプローチ

本研究の目的は、組織的な業務改善の促進を通して教育の質向上に繋げることです。管理職面談や全教職員調査で教職員の協働性や業務負担の現状を可視化しました。確認できた学校の強みである協働性を基盤に校内業務の手順や共有の在り方を整理し、属人化や業務の重複が起きないシステム構築を進めます。



M1 久保田慎さん 不登校予防につながるチーム支援の在り方について



OODA ループを校内ケース会に導入し、特に観察を起点とした支援検討プロセスの特徴を分析しました。その結果、観察フェーズを中心に据え、児童の具体的な様子や学校における日常的支援の情報を体系的かつ共有可能な形で整理することが、OODA 的ケース会の実効性を高めることが示されました。

M1 小林絵里子さん 組織力を高める校内研修の在り方

実習校の校内研修の現状と課題を踏まえ、その改善を通して組織力向上に資する校内研修の機能と意義を明らかにすることを目的として研究を進めています。今後は、授業研究のサイクルについて学校課題を軸に再構築し、研究主題に沿った協議が行えるよう改善していく予定です。



M1 西岡佳也さん よりよい学校組織形成のための学年会運営について

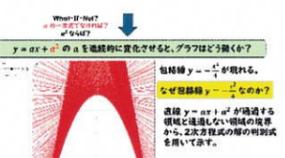


本研究の目的は、学校組織の最小単位である学年団における「学年会」に着目し、その役割の明確化と、その役割を遂行するための校内環境や組織の在り方を検討することです。1年目は「学年会」の運営の実態を把握し、課題整理を行いました。今後は、課題への具体的な方策を実践、結果検証へと進めます。

【授業実践コース】

M2 澤田浩介さん 問題設定による深い学びをめざした数学授業の研究

高校数学授業で創造的態度を養うために、生徒自身が問題設定する活動を取り入れることを研究しています。ICT を活用して一次関数や二次関数の係数変化に伴うグラフの動的変化を見取る活動を通して、図的現象から数学的法則を帰納的に推論し、それを演繹的に証明する教材の開発・実践を行いました。



M2 中村大助さん 道徳的判断力を育む手立てと道徳的環境との関連に関する研究



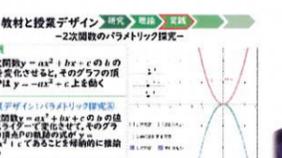
コールバーグ理論のもと道徳的判断力を育むことと集団の道徳的環境を構築することの関連を図った授業を実践しました。道徳的な課題や葛藤についての対話や討論などの工夫や、道徳と特別活動や総合的な学習の時間との関連を図る工夫によって、道徳的環境を支える道徳意識が醸成されると考えられました。

M2 西村朋花さん 生徒が主体性を発揮する中学校理科の授業デザイン ー興味・関心を高め、見通しを持たせる授業展開の工夫ー

個々の生徒が仮説を立てることや、条件制御の考え方はたがせながら検証計画を立案すること、仮説を振り返りながら考察することが見通しを持たせることに効果的です。見通しに着目した本授業デザインが生徒に興味・関心や見通しを持たせるうえで効果があることが検証されました。



M2 藤井圭介さん ICT を活用した数学科の授業デザインの研究 ー生徒の動的操作を通してー



ICT を数学的教具として用いて生徒が主体的に操作して課題解決をするための教材開発と授業デザインの研究をしています。2年目後期は、2次関数の係数を変化させる教材と「条件を緩めて」検証する図形の教材を開発し実践、また昨年度開発した ICT 教材を他の数学教員に使用してもらった実践を行いました。

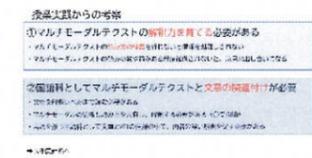


M2 松本恭也さん 科学的に探究する力を育てる高等学校理科の授業構想

生徒同士の対話に着目した高等学校理科の授業構想を行い、対話を媒介するためのツール・科学的な思考の根拠となる客観的な事実、教師の意図的な介入、ポートフォリオの活用が生徒同士の対話を活性化させ、建設的相互作用を生起することで科学的に探究する力の育成につながることを示唆されました。



M1 笹本 涼介さん 国語科におけるマルチモーダルテキストを利用した対話力の育成



対話力を育成するために、複数のモードで構築されたマルチモーダルテキストを使った国語の授業実践を行います。国語科として文章とマルチモーダルテキストを関連づけながら双方の読みの力を育成し、マルチモーダルテキストを使った対話的で深い学びの授業を目指していきます。

M1 時久祥香さん 中学校英語科における生徒のエンゲージメントを高める指導法の研究

中学校英語科において、生徒が協同的に学び、内容の理解を深める授業の在り方を探るため、構造化された協同学習と香港との遠隔交流を取り入れた実践を行いました。仲間と役割を分担し、実際の相手に向けて英語で伝える活動を通して、学習への意欲や関わりが広がりました。今後は、生徒の声を授業改善に活かす授業実践の研究を進めていきます。



M1 和田萌花さん 「個別最適な学び」を活かした道徳科の授業づくり ー子供が問いを持ち、自己決定する学習を通してー



OPPA 理論を活用し、問いを起点に自己決定・自己評価を行う道徳科授業を実践・検証しました。その結果、問いを持つ意識の向上が見られましたが、学習意欲に課題が見られたため、今後は自己調整学習の視点から、個に応じた学びを深める授業改善が必要であると考えます。

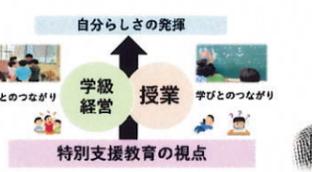
【特別支援教育コース】

M2 一谷七菜さん 高等学校における認知特性に応じた学習方略の研究

高等学校の英語教育に焦点を当て、生徒の認知特性に応じたオプションを活用した自己調整学習の環境を設定することで、生徒の授業参加率及び学習内容理解度が向上し、学習上の困難さが軽減するかについて検証を行った結果、参加率、理解度の両方において向上が認められました。



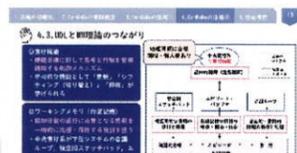
M2 濱田久司さん 特別支援教育の視点に立った全員参加の学級経営



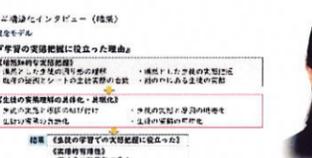
全員が学びやすく授業に参加するためには、「人とのつながり」、「学びとのつながり」が必要であると考え、授業UDの実践を行ってきました。学校でできない学びを行うには、特別支援教育の視点から授業を構成することが必要で、よい学級経営へつながると感じています。

M2 濱田宏美さん 高等学校における特別支援教育のための Co-MaMe を用いた生徒理解ツールの開発

国立特別支援教育総合研究所の「連続性のある多相的多階層支援 Co-MaMe」が、高等学校における特別支援教育推進に向け、組織的に運用可能な共通のツールとして有効であることを検証しました。生徒と教員双方に Co-MaMe を実施することで、生徒の自己理解・教員の生徒理解を高める効果が期待できます。



M2 溝淵優希さん 学習面の実態把握と手立ての構築を支援するツール開発



生徒の実態把握や実態に即した手立ての構築を支援する教師用ツールを作成しました。明らか&便利シートは病気・障害ごとの実態把握や手立ての構築を支援し、お試しシートは教科会の協議を支援します。質問紙調査と半構造化インタビューからシートの効果と効果の要因を確認しました。

M1 青山維さん 定時制に在籍する特別な支援を要する生徒に適した数学の教材開発

アセスメントの結果より、対象生徒は具体的操作時期に該当することが明らかになりました。そのため、具体物や動画教材を用いて授業実践を行うことにより、概念的知識への深まりが見られました。しかし、記憶の定着には課題が見られるため、どうすれば記憶を定着させられるかについては検証が必要です。



M1 川田彩加さん 県立中学校における基礎的環境整備と合理的配慮の具体化



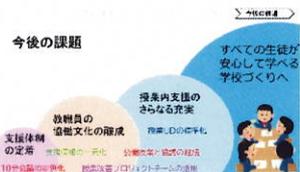
本研究はインクルーシブ教育に着目し、基礎的環境整備と合理的配慮の一体的な実践が、多様な困難を抱える生徒の学習や学校適応に与える効果を検証しました。UD 授業と個別支援を同時並行で展開することで、学力と仲間意識を相乗的に高め、生徒の自律的な成長を促す支援の在り方を探ります。

M1 高橋美里さん 特別支援学校における特別活動を軸としたキャリア教育

特別支援学校の特別活動を軸として、キャリア・パスポート「ゆめ☆みらいノート」を活用し、目標設定や振り返りを通して自己理解を促進しました。地域清掃活動では、目標の明確化や協働が主体的な参加につながりました。今後は高等部との連続性などを検証し、よりよく生きる力の育成を目指します。



M1 山岡ゆう子さん 特別支援教育の体制づくり 一効果的な支援方法一



高校における特別支援教育の充実を目指し、短時間で支援情報を共有できる「10分会議」の活用や、全教員が生徒支援に関わる体制づくりを進めました。さらに、誰もが学びやすいUD授業の推進にも取り組みました。これらの工夫が、支援の質や生徒の学習意欲にどのような効果をもたらすのかを検証しました。

【学校マネジメントコース】協議では、教育政策で注目されるウェルビーイングを手がかりに、「概念は多義的で、答えを固定せず違和感や論点を探ることが重要」との確認がなされました。院生発表からは、教員と子どものウェルビーイングが相互に循環し、対話・共同活動・心理的安全性が土台になる一方、働き方改革が負担軽減に偏ると同僚性や承認といった社会的健康が弱まる可能性も示されました。実現方策として、現状把握と目標共有を踏まえた学校全体のスモールステップ、アサーション研修、教科担任制、授業改善などが提案されました。また、学校は公共空間であり、個々の幸福追求と共通の教育目的をどう調停するか、最低限を保障する制度基盤をどう設計するかが課題として共有されました。

【授業実践コース】協議では「子どもの学びに関するAI活用の可能性と課題」をメインテーマに、「舵取りする力」の育成と現場の課題を踏まえ、AIを、思考を深める可能性として捉え、授業の中でAIとどう向き合うかを検討しました。小グループでの協議では、事例の可能性や思考力の担保を巡り活発に議論しました。講評では、不確実さに耐える「ネガティブ・ケイパビリティ」を持ち、教員自身が目標を問い直し続ける姿勢がこれからの教育の姿であると示され、AI時代における教師の在り方を全参加者で共有することができました。

【特別支援教育コース】小・中・高等学校と特別支援学校の児童生徒が共に学ぶ「交流及び共同学習」についてグループ別に協議を行いました。「協働的な学び」とは、単に同じ空間にいる（共同）だけでなく、役割分担や連携を意識し、互いを尊重しながら目標達成を目指す（協働）プロセスを重視するものです。各校種の現状と課題を共有し、単発行事から日常的な協働への転換、ICT活用、教員間連携の強化など具体的な改善策が提案されました。校種の特性を生かした対等な関係づくりを基盤に、全ての児童生徒が共に学び合える環境の実現を目指して今後も議論を深めてまいります。

当日は天候にも恵まれ、多くの方々にご参加いただきました。また、各発表会場では参加者の皆様から貴重なご指摘やご意見を数多く戴きました。今後は、頂いたご指摘やご意見を生かし、教育実践および実践研究の一層の充実を図ってまいります。ご参会いただいた皆様にご心より御礼申し上げます。

次回「第17回土佐の皿鉢ゼミ」は、2026年8月18日（火）に開催予定です。今回同様、多くの方々のご参加をお待ちしております。

発行者：高知大学大学院教職実践高度化専攻長 中野俊幸
 編集者：教職実践高度化専攻総務係・ニュースレター委員
 発行日：2026年3月9日
 事務局：教職実践高度化専攻附属学校教育研究センター
 〒780-8520 高知県高知市曙町2-5-1（教職大学院係）
 TEL 088-844-8457
 E-mail ks33@kochi-u.ac.jp